

日本記者クラブ会報

公益社団法人 日本記者クラブ 〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-2-1 日本プレスセンタービル TEL. 03-3503-2722 <http://www.jnpc.or.jp/>



撮影：福島 範和（産経新聞東京本社写真報道局）

短期決戦

急ぎょ走り出した総選挙。「もう待てない」と、22日投開票を前提に解散前から選挙ポスター掲示板の製作が始まっていた=9月23日、長野県千曲市「シナノスクリーン工芸」

**解散・総選挙から政界激変へ
党首討論会、異例の日曜開催**

「首相、28日解散」総選挙、10月22日を軸に――先月某日、朝刊一面に活字が踊った。いま思えば、これが野党再編の大激震を告げる号砲だった。

この時、日本記者クラブでは優先事項として、安倍改造内閣の主要閣僚や民進党の新執行部をゲストに呼ぶ交渉の真つ最中だった。しかし解散をうけ、国政選挙の定番である当クラブ主催の党首討論会の準備に切り替えた。

この党首討論会は公示日前日の開催が慣例だが、今回は公示日が新聞休刊日にあたり、慣例通りに実施すると、討論会の内容が翌日の朝刊に掲載されないことになる。そこで日程を1日前倒して異例の日曜開催となった。

「異例」はこれにとどまらなかった。小池百合子都知事を代表とする「希望の党」結党、民進党の「希望の党」への合流：政党の誕生、消沈が連鎖反応のように起こり、党首討論会に誰が出席するのか直前まで未確定という前代未聞の状況になった。特に「希望の党」は当初、交渉の窓口役も分からず、当クラブの会見に来た小池代表本人に直接依頼し参加の確約を取り付けた。

この原稿の締め切り（10月1日）時点でも状況はまだ流動的だ。この会報が届く10月中旬には、熱気を帯びた党首討論会が成功裏に終わっているはずだ。

（専務理事 土生修一）

個人D会員の入会数が急増

今年度半年で昨年1年を上回る

記者OBを中心とする日本記者クラブの個人D会員総数は9月末現在で832人だが、過去10年間で毎年平均で17人ずつ減少を続けており、このままいくとクラブの財政基盤にも悪影響を与えかねないとの懸念が指摘されていた。

このため、個人D会員を増やすために、今年4月に月会費を6100円から5000円に値下げした。さらに加盟各社の社報などを通じて、改めて会員メリットを紹介したり、募集パンフレットを配布するなど入会キャンペーンを展開してきた。

そのかいあってか、4月の値下げ以来、半年間の個人D会員の入会数が34人となった。ちなみに、昨年度

のD会員の年間入会者数は、31人だった。つまり、今年度は半年間で、昨年1年分の入会者数を上回ったことになる。

何人かの新会員に入会の動機を聞いた。

「政治の動きが急でニュースを読んでもよくわからない。クラブの会場で『時代の行方』を直接感じたい」と「退社後、自分で取材をはじめたが、会社の看板がないと簡単には取材対象から直接話を聞けない。会見参加は貴重な機会」「勉強会、同窓会などの会合場所として利用できるから」

また、「経済、文化関係のゲストをもっと呼んでほしい」「前川喜平・

クラブゲスト 3
伊佐進一・衆院議員／アミラ・ハス・イスラエル人ジャーナリスト／ロヒンギャ難民支援の日赤医療関係者／フランセス・フィッツジェラルド・アイルランド副首相／馬立誠・元人民日報論説委員

会見リポート 4・7
ダグ・ハディックス・IRE事務局長／河野洋平・元衆院議長／木内登英・前日銀政策委員会審議委員／ハンス・カール・フォン・ヴェアテルン・駐日ドイツ大使／阪田恭代・神田外語大教授／程永華・駐日中国大使／小池百合子・東京都知事・希望の党代表

ワーキングプレス 8・10
北朝鮮ミサイル発射
本番中にJアラート 報道にも冷静で現実的検証が必要

テレビ朝日 桐永洋
眞子さま・小室さん婚約内定
会見は事前質問7問のみ
厚い壁から透けた二人の素顔

東京新聞 小松田健一
サッカー・ハрилホジッチ監督
頑固だが、憎めない指揮官
質問拒否会見の思惑は
スポーツニッポン新聞社 木本新也

新・列島報告 神戸市 11
「不倫市議」から「不正市議」へ
異様に高まった報道価値
神戸新聞社 森本尚樹

被災地通信 岩手県岩泉町 12
台風10号豪雨から1年 教訓つなぐ報道を模索
岩手日報社 川端章子

山本祐司さんを偲ぶ 13
高尾義彦
上映会「葛根廟事件の証言」 13
読売新聞社 天日隆彦

書いた話書かなかった話 14・15
モンテ・クリスト伯の影 イタリア
自然保護区の孤島へ 後藤文生

リレーエッセー 16
「日中国交回復は裏安保」
角栄さんの肉声の意味と真意
新潟日報社 小田敏三

マイBOOKマイPR 17



取材に応じてくれたテッド・ヨーホー米共和党下院議員（アジア太平洋小委員長）=9.26

訪米取材団が全日程終了

9月24日から1週間にわたり、米ワシントンを訪れていた日本記者クラブの米国取材団（団長＝杉田弘毅・共同通信社論説委員長）が全日

前文科事務次官の会見では、緊張感ある質疑応答の場面に立ち会え、現

役時代を思い出した」などの感想があった。

事務局としては、今後、読書、執筆しやすいラウンジ改良や「呼んでほしいゲスト」の投票箱設置など、会員の皆さんにとって「より使い勝手のよいクラブ」をめざす改善を検討中。

現会員の皆さんには、先輩、同僚、後輩に入会をこれからも広く呼び掛けていただければ幸いです。

程を終え、1日に帰国した。

今回の取材団のテーマは「トランプ政権と米国メディア」で、9社11人が参加、ニューヨーク在住のジャーナリスト津山恵子さんも案内役として取材団に加わった。

取材団は、トランプ政権に厳しい視線を向けるワシントン・ポスト紙の本社を訪れ、キャメロン・バー編集局長ら編集幹部と会見、リニューアルされたばかりのニューズルームも視察した。そのほか、ウォール・ストリート・ジャーナル紙のホワイトハウス担当記者、トランプ支持のネット・ジャーナリスト、共和党、民主党の下院議員などにも会った。

取材団の活動報告については、来月号で詳報する。

（土生修一）

下記のゲストの会見レポートは
4～7ページに掲載しています

ダグ・ハディックス 米調査報道記者・編集者協会 (IRE)事務局長

■9・5(火) 記者会見「米国の調査報道」/司会: 奥山俊宏朝日新聞社編集委員/通訳: 宇尾真理子/出席: 67人

河野 洋平 元衆議院議長

■9・20(水) 記者会見/司会: 倉重篤郎委員/出席: 110人

木内 登英 前日銀政策委員会審議委員

■9・22(金) 記者会見/司会: 福本容子委員/出席: 68人

ハンス・カール・フォン・ヴェアテルン

駐日ドイツ大使

■9・25(月)「連邦議会選挙後のドイツ」/司会: 倉重篤郎委員/通訳: ベアーテ・フォン・デア・オステン/出席: 42人

阪田 恭代 神戸外語大学教授

■9・25(月) シリーズ企画「北朝鮮の核とミサイル」⑧/司会: 山本勇二委員/出席: 81人

程永華 駐日中国大使

■9・26(火) 昼食会/司会: 西村陽一企画委員長/代表質問: 坂東賢治委員/出席: 101人

小池 百合子 東京都知事・希望の党代表

■9・28(木) 記者会見/司会: 瀬口晴義委員/出席: 313人

会見余話

●「息子に言及しづらい」と苦笑

日中友好に長年、関与してきた河野洋平元衆議院議長が登壇した。

テーマは日中関係だったが、国会解散の見通しが一気に強まった時期だったので、控室では、「こんな時期に私の話を聞きに来る記者はいるんですかねえ」。しかし、会場はテレビカメラも並び、出席者も100人を超えた。

80歳とは思えない若々しく良く通る声で、現政権について苦言を呈した。

ただ、質疑応答では、息子である河野太郎外相についてのコメントを求められ、「言及しづらいですね」と苦笑した。

●外国人ゲストが続々登場

このところ、外国人ゲストの割合が増えている。

9月は12件のうち、外国人ゲストはアイルランドのフィッツジェラルド副首相を含め6人となり半数を占めた。10月もすでに6人の外国人ゲストが予定されている。

内容も、チリの元大統領、独仏中の駐日大使などと多彩だ。変わり種としては、自動車衝突予防システムの開発などで世界的に有名なイスラエルの「モービルアイ」社の共同創業者も登場。

伊佐 進一 衆議院議員



東大で航空宇宙工学を学び科技厅へ。駐中国大使館での勤務経験もある。「日中関係はエモーションからシステムになるべき。関係悪化しても科学交流だけは途切れなかった。重視すべき分野」。科学研究で日本が中国に凌駕されている現実もデータで提示した。

■9・8(金) 記者会見「科学技術と日中交流」/司会: 坂東賢治委員/出席: 40人

アミラ・ハス イスラエル人ジャーナリスト



イスラエル・ハーレツ紙占領地特派員として93年からガザとヨルダン川西岸で取材。「パレスチナは、外交官や政治家の言葉と現実ギャップがあり、国際メディアもそれを助長している」と厳しく指摘。「ガザと西岸は切り離され、住民は一体感を持ちえていない」

■9・19(火) 囲む会/司会: 杉田弘毅委員/通訳: 宇尾真理子/出席: 41人

ロヒンギャ難民支援の日赤医療関係者

横江 正道 医師(右) 矢野 佐知子 看護師



ロヒンギャ避難民が多く流入するバングラデシュ南部に入った日赤医療チーム先遣隊が帰国翌日に会見。「避難民の増加が尋常でない。明日の予測も困難。自然災害支援との違いを目の当たりにした」(横江)「診療と共に、女性や子どもたちの心のケアが必要だと強く感じた」(矢野)

■9・27(水) 記者会見/司会: 宮田一雄会員/出席: 41人

フランセス・フィッツジェラルド アイルランド副首相兼企業・イノベーション大臣



「英国のEU離脱はアイルランドにとってチャンス」。英語を母語とし、同じような法体系を持ち経済が安定している同国への関心が高まっていると言う。大筋合意した日EUのEPAで「日本からの輸出の7割で関税が下がる。農産品、医薬品などが伸びるのでは」。

■9・29(金) 記者会見/司会: 鶴原徹也委員/通訳: 宇尾真理子/出席: 30人

馬立誠 元人民日報論説委員



一緒に来日した識者らと国交正常化45年当日に会見。歴史問題を繰り返し持ち出す中国を批判した論文から15年。「戦術的実利ではなく深い相互理解の関係を」と訴える。親日家は肩身が狭い?との質問に「中国嫌いの日本人よりも日本嫌いの中国人の方が少ない」と。

■9・29(金) 記者会見/司会: 坂東賢治委員/通訳: 大森喜久恵/出席: 61人

ダグ・ハディックス

米調査報道記者・編集者協会（IRE）事務局長

リアルニュースに集中を

トランプ米大統領の就任以来、メディアはフェイクニュース（偽のニュース）という批判や政治権力による圧力といった事態に翻弄されている。その渦中にある米調査報道記者・編集者協会（IRE）のダグ・ハディックス事務局長は「とにかくリアルニュース（真実のニュース）に集中することが重要」などと語った。「一強多弱」といわれる政治状況の中、同様の課題を抱える日本の報道現場にも示唆に富む会見だった。



IREは調査報道を支援する米国のNPOで、1975年に設立された。世界から5500人のジャーナリストや学者、学生らが参加。研修会などを通じ、データを駆使した取材方法やソーシャルメディアの活用など実践的なノウハウ

を、記者が講師となって伝授している。

米国の新聞業界は10年前に比べ規模やスタッフが半減し、ニューヨーク・タイムズなど主要紙だけが成長している。そんな厳しい環境下でも新聞、テレビ界は「権力を監視し、アカウンタビリティ（説明責任）を重視した調査報道の価値を再発見しているさなかにある」と指摘した。

ツイッターによる発信やメディアを敵視するトランプ大統領に報道がどう向き合うかについては、2つの方向性を示した。1つは大統領が何を発信したかではなく、具体的な行動を報道すること。そして2つ目は、報道の自由の抑制には徹底して戦うことだ。そのためには、メディアの連帯が重要と訴え、「米では1人のジャーナリストに対する攻撃は全てのジャーナリズムへの攻撃との認識が高まっている。連帯は100パーセントではないかもしれないが、希望を感じる」と強調した。

会見では、最近の優れた調査報道の事例も映像を交えて紹介。全米で100以上のNGOが発足し、地方都市では地方紙との新たな競争が起きる一方で、連携する動きも出るなど調査報道の可能性が報告された。

神戸新聞社東京支社長 村上 早百合

河野 洋平

元衆議院議長

ご意見番の面目躍如 日中間の交流拡大を



ご意見番の話を聞くには絶好のタイミングだった。北朝鮮がミサイル実験を繰り返す中、安倍晋三首相が臨時国会冒頭で衆院を解散

する意向だと伝えられていた。

本人も意識して「日中間問題などしやべっている場合かねと言われかねない状況ですが」と言いつつ、日中国交正常化45周年の話から始めた。

9月8日に北京の人民大会堂で開かれた記念式典の前に俞正声・全国政治協商会議主席（共産党序列4位）と面会した際「日中間には複雑な問題がある。ボールは安倍さんが持っている」と言われたことを紹介し、「中国側の安倍政治への懸念は解消していない」という見方を示した。

そして「日中関係で一番心配なのは相互の国民感情だ」と指摘。日中

関係の重要さを理解しながら信頼できない状況を改善するため人的交流を盛んにするべきだと提言した。

話は北東アジアに及び、北朝鮮への制裁がうまくいかないのは中国の責任だ、という日本国内の論調を懸念。最も影響を受ける日中韓が一体となって北朝鮮を説得し、同時に中国と米国が北朝鮮の将来をしっかりと考えるべきだと持論を展開した。

来年の日中平和友好条約締結40周年にむけて「日中両国で覇権問題についてお互いに考えよう」と中国側に提案すべきだ」と語った。

質疑に入っても舌端は衰えず、冒頭解散について「できるだけ丁寧国民に説明する」と言っていたのに、冒頭解散するのは私には理解できない」と批判。「権力が自分の都合が良い時に解散するのは果たしていいのか議論すべきだ」と訴えた。返す刀で「国民は国会に対する怒りや悔しさを簡単には忘れない。しかし、野党もじつんだを踏んだはずなのに忘れてしまっているのが残念だ」と言い、野党の自覚を促した。最後に「真の民主主義の再生を願う」と揮ごう。その言葉にふさわしい1時間は、短く感じられた。

朝日新聞社編集委員 渡辺 勉

木内 登英

前日銀政策委員会審議委員

まだ間に合う
日銀の軌道修正

今年7月、日銀の中枢から2人の異端児が去った。総裁以下9人で構成する最高意思決定機関、政策委員会。そこで2012年7月から審議委員を務め、黒田体制による異次元金融緩和に異論を唱え続けた2人の、任期満了に伴う退任である。



野村総合研究所の木内登英・エコノミスト

ミストはその1人だ。会見では、政策の副作用として最も懸念すべき問題に「国債バブル」を挙げた。

日銀による国債の大量購入が長期化する中、投資家が市場で自由に売買できる国債の量は極端に細り、価格はかつてない水準まで上昇している。木内氏は今の購入ペースが続けば、来年5月にも限界に達するとの見方だ。

限界に達した時、市場では国債価格の乱高下が起こり、日本経済が不安定になるばかりか、世界の金融をも揺さぶりかねないと警告した。それでは、軌道修正による危機回避はまだ可能か。

木内氏は、無傷での政策正常化はもはや無理だとしても、国債の買入れペースを落として、限界となる時期を遅らせることは可能と述べた。さらに、日銀が看板目標を降ろすことは容易でないが、物価目標「2%」をより柔軟に扱う政策への転換は、いずれありうると述べた。

日銀の政治からの独立についても重い発言があった。

中央銀行の独立性は単に法律の文言で守られるのではなく、最後は国民からの信頼が担保になる。木内氏はそう述べたうえで、2%達成時期の予想をたびたび修正したり、異次元緩和から脱却する際のリスクを「ありません」のひと言で片付けようとしたりすることが、日銀への信頼性低下を招いていると指摘した。

信頼性が落ちたとき、「日銀だけに任せておいていいのか」という意見が出かねない。日銀がまさに恐れるべき事態ではないか。

企画委員 毎日新聞社論説委員

福本 容子

ハンス・カール・フォン・
ヴェアテルン

駐日ドイツ大使

「民主主義」「開かれた国」は
不変

大勢判明からまもなく、各国駐在ドイツ大使の中でいち早く会見に臨み、与党の大幅議席減と右派政党AfD（ドイツのための選択）の躍進という厳しい結果にも、「国民の



87%が民主主義と欧州統合を推進する政党に票を投じた」として政府の政策に影響はないことを強調、「AfDの全員が極右・ネオナチではない」とも述べ、懸念の払拭に努めた。

「選挙結果は驚きではない」とはいえ、いつもより表情は硬かった。反イスラムやユーロ離脱を掲げ、ナチス時代の責任を回避する発言まで飛び出す過激な政党に8人に1人が票を投じた事実は衝撃である。旧東独地域では得票率が20%を超え、社会民主党を上回る勢力となった。

英国のEU離脱やトランプ政権発

足といったポピュリズムのうねりに対する防波堤とされたドイツもまた大きな試練に立たされている。「グローバル化への失望や大量の難民流入への不安や不満を持つ人たちに對して政治家や外交官、さらにはメディアが正面から取り組んでいかねばならない」

連立の行方については、社会民主党が下野する方針を示したため、キリスト教民主・社会同盟と自由民主党、緑の党の黒黄緑3党による「ジャマイカ連立」の可能性が高い。「どんな連立になろうと民主主義の理念を追求し、世界に開かれた国であることは変わらない」として今後も欧州統合や日独協力関係を重視する姿勢を強調した。ただ、各党の政策は大きく異なるだけに連立交渉は難航必至で、12月末までかかるのではないかとの見通しを示した。

4期目の任期を全うすればコール元首相に並ぶ16年の長期政権となるメルケル首相だが、次の4年はこれまで以上に厳しいものになりそうだ。駐日大使として3年半、記者クラブ6回目の常連は、いつものように明快で丁寧な受け答えだったが、次の会見も歯切れの良い答弁が聞けるのだろうか。

NHK解説委員 二村 伸

阪田 恭代

神田外語大学教授

「北風と太陽」の戦略で対応を

北朝鮮の核・ミサイルをめぐる対立が激化する米朝。米国は軍事攻撃に出るのか対話に転じるのか。気鋭の国際政治学者は、軍事攻撃も対話もせず、圧力をかけ続けることになるとみる。



これに北朝鮮がどこまで耐えられるかが問題となるだろう、という。だが北朝鮮は以前よりかなり耐久力があるとも指摘する。

韓国の延世大学に留学し、米ジョージ・ワシントン大学で客員研究員を務め、朝鮮半島の国際政治と安全保障の両分野を専門とする。このため安全保障の面では「厳しくばつさり」とした分析が必要だが、国際政治の観点からは「北朝鮮の核・ミサイル問題で」何かいい知恵がないか」と考えており、2つの視線が交差している中で、答えはないという。

北朝鮮は7月から9月にかけて、大陸間弾道ミサイル(ICBM)や、日本の上空を通過する中距離弾道ミサイルをそれぞれ2回発射し、さらに水爆実験を実施した。こうした北朝鮮の核・ミサイルの脅威は今、沸点に達しているようにも思えるが、「これまでの脅威は70〜80パーセント程度で、来年もさらに続くだろう」とみている。

問題は核弾頭搭載のICBMの完成で、建国70周年を迎える来年9月9日か朝鮮労働党創立記念日の10月10日には核戦略の完成を宣言するだろうと予測する。

北朝鮮が米国など国際社会の圧力で対話に応じるか。北朝鮮では金正成主席、金正日総書記、そして金正恩朝鮮労働党委員長の3代にわたり、核・ミサイル開発を続けてきた。金正恩氏は、核保有国の地位確立を目指し、自らの政権の正当性を図っていることから、金正恩氏がICBMの完成までは対話に応じる可能性は低いとみている。

結局、北朝鮮への対応には「北風と太陽」のような硬軟両面の戦略が求められると指摘する。

共同通信社客員論説委員 安尾 芳典

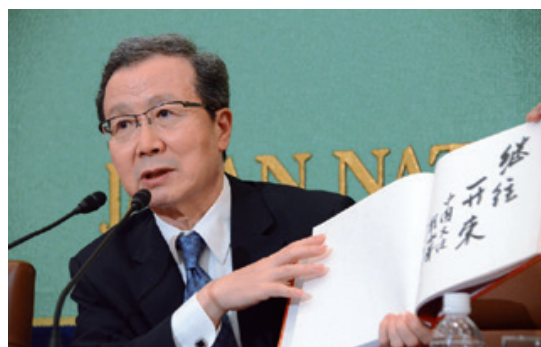
程永華

駐日中国大使

日中両国に必要なのは信頼と協力

「『日本記者クラブには、また参りました』というような懐かしい気持ちになりました」

開口一番そう切り出した程永華大使は、日本に赴任してまもなく8年という歴代中国大使の日本駐在記録を更新中だ。日本記者クラブでの会見も、破格の4回目となった。



会見では、まず赴任以来の日中関係を振り返り、経済や社会、人的交流などの面で多くのプラスの変化が起きたことを列挙した。また中国が提唱する「一帯一路」構想での日中協力の発展に期待感を示した。

その一方で、両国関係が「領土問題、歴史問題、海洋問題」など多くの困難に直面したとも語り「両国間に必要なのは信頼と協力であって、猜疑と対決ではない」と強調した。

会見を聞いて感じたのは、程大使が日本側を批判することを最小限に

抑えたように思えたことだ。

むしろ発言の中には「双方が」「互いに」など両国の立場を共に尊重する言葉が多かった。「日中関係を重視する中国の政策は変わらない」と訴えたことも印象的だった。

批判らしき部分を強いて挙げるなら「一部の人は、なお古い冷戦思考で中国に対処し、中国をどう牽制し、どう防ぎ止めるかということを常に考えているように思う」と触れたあたりだが、日本の「一部の人間」への苦言という形にとどめた。

尖閣諸島をめぐる中国公船の動きなど鋭い質問も出たが、程大使はあえて「釣魚島」という中国側の呼称は使わず「島」とだけ表現するにとどめ、事を荒立てることを避けたように感じた。

もちろん、それは日本のメディアを前にした外交辞令かもしれないが、日中国交正常化45周年という節目を迎える中、「半生深く関わってきた日中関係を大切にしたい」という程大使自身の率直な気持ちも込められていたのではないか。

NHK解説委員 加藤 青延

小池 百合子

東京都知事 希望の党代表

政権奪取に意欲示すも
自身の衆院出馬は強く否定

それは計ったような絶妙のタイミングだった。9月28日午後。小池百合子東京都知事は冒頭、こう切り出した。「日にちをずらしたら、飛んで火にいる何とかになった」

記者会見は当初、8月末に予定されていたが、後日、都臨時会の開会日程が入り、再設定されたのが、この日だった。前日には自ら代表を務める希望の党が旗揚げし、当日は会見3時間半前に衆院が解散されたばかり。当然ながらクラブの会場を多くの報道陣が埋め尽くした。最大の焦点は小池氏の衆院選出馬の可能性だった。

これについて小池氏は質疑応答に



先立ち、日本では首相が国会に拘束されすぎている点を指摘してこう語った。「私が国政に戻るのではないかと、朝から晩までテレビでいろいろ賑わっているが、私は今の国会が変わらない限り都政でしっかり頑張る。私のエネルギーはまず都の方に置き、東京五輪・パラリンピックの準備をしっかりやる」

強い否定に聞こえるが、出馬を完全否定しなかったのも事実だ。このため会見後も小池氏の衆院選出馬説はやむことはなかった。筆者の勘では、小池氏は出馬説を公示直前まで完全否定せずにメディアの注意を引き、結局は都知事にとどまる戦略とみているのだが…。

一方で、小池氏は安倍政権への対決姿勢を鮮明にした。今回の選挙で政権奪取を狙うかと聞かれると「最初から野党を狙って選挙に臨むことはない」と言い切った。安倍晋三首相が9月解散に踏み切ったことには「北朝鮮情勢が厳しい中、2019年の消費税増税の使い道で信を問うのはお門違いだ」と批判。「加計学園」疑惑に関しては「お友達優先の特区や、しがらみの中での改革は改



革とは言わない」と断じた。

記者側から憲法問題について安倍氏との差異が分からないと指摘された小池氏は、首相が目指す憲法9条改正を引き合いに「これまで（自衛隊は）合憲と言っていたのに、3項を付け加えるのは理解に苦しむ」と難じた。

会見中、民進党が両院議員総会で希望への「合流」了承の一報が入ると、「民進党の前原誠司代表は大変重い決断をした」と評価。同時に、民進党側からの公認申請は個別に精査する考えも示した。

会見時間は約70分間に及んだ。都政の課題や取り組みについては前段でスライドを使いながら説明したが、短めに切り上げた。会見前は、都政中心の話になり国政には踏み込まないのではと危ぶむ向きもあったが、杞憂だった。「私はオンとオフがはっきりしているの」。小池氏が時々口にする言葉だ。この日は明らかに「オン」状態だった。

企画委員 時事通信社解説委員長

山田 恵資

程大使とクラブ

世界の外交官は2種類に分かれる。記者と話すのが好きな人と記者を遠ざける人だ。不思議にどこの国に行っても、ジャーナリストと議論したがる大使に出会うこともあれば、まさに外交辞令だけの無愛想な大使もいた。

程永華中国大使はおそらく、記者との距離が近い外交官に属するだろう。日本記者クラブで4回目の会見も通訳なしで記者との対話を心がけているように見えた。

たとえば尖閣諸島をめぐる質問には、1978年10月の鄧小平副首相会見に出席した体験談で答えた。「私は大学を卒業したばかりで連絡担当をしていた。鄧小平先生がこの記者クラブで『次の世代は賢くなるでしょう』と答えると、会場から拍手が起きました。新聞記者はいつも鋭く突っ込むのに、相当、共感していたという記憶があります」

在京大使館に初めて赴任したのは40年前。計5回勤務し東京暮らしは20年を超える。「日本記者クラブは大きなプラットフォームだ」。記者研修の大使館訪問や中国への取材団派遣などクラブとの関係も程大使の8年間で深まった。恒例の揮ごうは「継往開来」。「成果を生かして未来を開く」と解説した。

前専務理事 中井 良則

北朝鮮ミサイル発射

桐永 洋(テレビ朝日)

本番中にJアラート 報道にも冷静で現実的検証が必要

「おはようございます！ 朝の情報まとめ番組、グッド！モーニングです」

8月29日、坪井直樹キャスターと松尾由美子キャスターがあいさつし、スポーツコーナーに入った直後の6時2分、副調整室にJアラートの警報アラームが鳴り響いた。スタッフに緊張が走る。私がJアラートの画面を直接オンエアに取り込むよう指示すると、松尾キャスターがコメントを読み始めた。

「Jアラートです。北朝鮮がミサイルを発射した模様です。頑丈な建物や地下に避難してください」

緊急対応はウチだけ 早まったか

テレビ朝日ではJアラートの訓練を重ねてきた。指定公共機関であるテレビ局には、国民保護のための情報を迅速に提供する義務が法律で定められているからだ。すぐに他局のモニターに目を移したが、緊急対応をしているのはウチだけ。「早まっ

たか?」。一瞬、血の気が引いた。

しかし、ほどなくNHKや民放各局の画面もJアラートに切り替わった。ミサイル発射という緊迫した場面にも関わらず、「誤報じゃなくてホッとした」というのが正直な気持ちだった。

CMを飛ばして緊急特番

黒ベースに白文字というJアラートのおどろおどろしい画面に、同じコメントの繰り返し。限られた状況で国民の安全に資するのが目的の放送なので、テレビ的な物足りなさはある程度しかたがない。問題は、いつまでこの状態で放送を続けるべきだったか。

実際には、Jアラートが発信された5分後の6時7分に、ミサイルは日本上空を通過していた。しかし、その情報がJアラートで来たのは6時14分。しかもその2分前の6時12分に、ミサイルは襟裳岬の東1180キロの太平洋上に落下していた。



落ち着いた番組進行に徹した松尾、坪井(右)両キャスター(テレビ朝日提供)

物理的にはすでに落下しているはずなのに、その情報がなかなかこない。危機が回避されるまではCMを飛ばしてでも放送を続けるしかない。

結局、ミサイル落下の情報が入ったのは6時30分過ぎで、それまではひたすら避難や安全確保を呼びかけることしかできなかった。

その後は専門家との生電話や、ソウル・北京・ワシントンの各特派員と中継を結びながら、徐々に態勢を立て直した。しかし7時過ぎまでCMを入れずに対応したしわ寄せで、番組後半はCMラッシュになってしまった。

そこに安倍総理の緊急会見が入ったため、本来流すべきCMを2本放送することができないまま番組が終了した。

危機あり過ぎとの批判も

今回のテレビ各局の対応については「大本営発表みたいだ」「危機をあまり過ぎていいる」などの批判も寄せられた。しかしあの時は正直、一刻も早く視聴者に情報を伝えることに集中していて、来た球を打つのに精いっぱいだった。ただ、どこよりも早くJアラートの一報を伝えることができた。坪井・松尾の両キャスターも落ち着いて冷静に番組を進行してくれた。その意味では、テレビ局として一定の役割は果たせたと思っている。

この原稿を執筆中の9月15日、「グッド！モーニング」を放送している最中に再び、北朝鮮がミサイルを発射し、Jアラートが鳴った。決して慣れたくはないが、北朝鮮の挑発は今後もしばらく続くと思われる。

国民の安全を守るためにどうすればいいのか。テレビに何ができるのか。Jアラートの在り方と共に、その報道の仕方についても冷静で現実的な検証が必要だと思う。

きりなが・ひろし▼1993年入社 警視庁キャップ ロサンゼルス支局長などを経て 2015年7月から「グッド！モーニング」チーフプロデューサー

眞子さま・小室さん婚約内定

小松田 健一（東京新聞）

会見は事前質問7問のみ 厚い壁から透けた2人の素顔

5月16日、NHKが午後7時のニュースで特ダネとして報道。翌朝、小室圭さんが勤める法律事務所が入居しているビルのロビーで急きょ設定された、ぶら下がり取材に駆け付けた。内親王の結婚は2005年の黒田清子さん以来で、天皇、皇后陛下の初孫が婚約するという注目度が高い出来事だけに、普段は宮内庁をカバーしていないスポーツ新聞や雑誌の記者も殺到し、ロビーは立すいの余地もない混雑に。ビルの周囲は、警察官が警備する異様な雰囲気

に包まれていたことを思い出す。宮内庁幹部に先導されて姿を見せた小室さんは、婚約内定前であることを理由に、質問の大半に明確な回答を避けたが、言葉遣いや物腰は好青年そのものだった。

それから3カ月半。9月3日の東京は好天に恵まれた。宮内庁長官が午前中に内定を発表し、午後3時から記者会見場となった赤坂御用地（東京・元赤坂）の「赤坂東邸」で、

眞子さまと小室さんは並んで座り、なれそめやプロポーズの様子、理想とする家庭像などを答えていった。2人への質問は計7問。6月の時点で、宮内庁の担当記者が加盟する「宮内記者会」が事前に通告していた。会見は当初、7月8日に予定されていたが、その3日前に発生した



婚約が内定し会見する眞子さまと小室圭さん（9月3日／東京・元赤坂／東京新聞提供）

九州北部豪雨に配慮して延期されていた。冒頭、眞子さまが九州北部豪雨被害へのお見舞いの気持ちを示すとともに「突然に報道されたことにより、多くの方にご迷惑をおかけし、申し訳なく思っております」と、報道が先行したことへの苦言とも受け取れる言葉もあった。

さらに会見直前、北朝鮮が6回目の核実験を強行する予期せぬ事態が発生。翌日の各紙一面は国際社会に脅威を与えた愚行と、皇室の慶事という対照的なニュースが並んだ。

「月」と「太陽」は新たな名言？

皇族の結婚をめぐる会見は、さまざまな名言を生んできた。天皇、皇后陛下では、皇后さまが陛下の魅力と語り、当時の流行語になったと聞く。皇太子さまは、雅子さまとの間に望む子どもを数を問われ「コウノトリの機嫌に任せて」と、ウィットに富んだ回答をされたのは記憶に新しい。

眞子さまと小室さんが、こうした先例を意識していたのかどうかは分からない。だが、古典文学の恋愛場面を思い起こさせるような、2人がそれぞれを「月」と「太陽」に例えたセンスには感嘆し、思わず膝を打った。

皇室取材の特異さと困難さは、取材対象に直接話を聞く機会が、極めて限られている点にある。取材の多くは、役所全体が皇室の秘書である宮内庁というフィルターを通して、地方での施設訪問などがあるが、同行記者が両陛下や皇族方へ声を掛けることは、原則として許されていない。記者は、説明者や歓迎に集まった市民との会話の一言一句を聞き漏らさないと思死にメモを取る。

だからこそ、こうした記者会見の場は貴重だが、宮内庁は内定会見で通告質問以外のことを聞く「関連質問」を認めず、会見は予定していた20分より大幅に短い約12分で終了した。用意されたシナリオに沿うだけではない、2人の素顔に迫ることができる場であったかどうかといえ、物足りなさを残した。

ともあれ、その後も週刊誌などには小室さんの収入や家庭の事情にかまびすしい。しかし、法律事務所に勤める市井の男性がプリンセスと学生時代からの恋を交わせた事実、皇室と国民の距離が、より縮まった証かもしれない。

こまつだ・けんいち▼1991年入社 東京本社の経済部などを経て 社会部 2016年4月から宮内庁担当

サッカー・ハリルホジッチ監督

木本 新也(スポーツニッポン新聞社)

頑固だが、憎めない指揮官 質問拒否会見の思惑は

らしいパフォーマンスだった。

8月31日、埼玉スタジアムで開催されたW杯アジア最終予選オーストラリア戦。2-0で快勝して6大会連続のW杯出場を決めた直後の会見で、日本代表のハリルホジッチ監督は「たくさんのことをお聞きになりたいと思いますが、プライベートの問題があるので、皆さんの質問にお答えできない」などと一方的に話し、質問を受け付けなかった。

異例の会見はマスコミへの対抗措置

ハリルホジッチ監督の母国ボスニア・ヘルツェゴビナの報道によると、入院中の義姉が深刻な容体にあるというが、質問を遮った真相は別のところにあった。指揮官は2016年9月1日のW杯アジア最終予選初戦でUAE(アラブ首長国連邦)に1-2で敗れたことで、予選を通して解任危機に直面。試合ごとに「負ければ進退問題」と報じ続ける一部



サウジアラビア戦で(2016年11月15日/スポーツニッポン新聞社提供)

マスコミを敵視していた。日本サッカー協会(JFA)関係者によると、歓喜の白星に水を差す異例の会見は対抗措置の一面もあったという。

頑固一徹。「私は外交的なことはやらない」と言い切る。06年に監督を務めたアルイテハド(サウジアラビアリーグ1部)ではフロントの現場介入が気に入らず、半年足らずで辞任。08年から指揮したコートジボワール代表では10年W杯南アフリカ大会出場決定後に解任されたが、協会幹部との確執が一因だったとされる。信念を貫くためには、周囲との衝突もいとわない。

気難しいだけに、取材も一筋縄で

はいかない。練習後のミックスゾーン(取材エリア)は全選手の対応が基本だったが、ハリルホジッチ監督の就任後は、取材に応じる選手は1日7人程度に限定された。食事、ミーティングなど分単位でスケジュールを組んでいくため、速やかにホテルに戻りたいとの理由だった。

運動記者クラブは「原則全選手取材」の要望を出し、広報担当を通じて交渉が続いているが、就任から2年半が経過しても、指揮官が首を縦に振ることはない。

自腹で報道陣にシャンパン 人間味あふれる一面も

自他ともに認める仕事の虫。過去の日本代表監督は週1回程度のペースで東京・文京区のJFAハウス(日本サッカー協会ビル)に来るのが通例だったが、ハリルホジッチ監督は、ほぼ毎日出勤。日本代表候補選手のチェックや、対戦国の分析などに時間を割く。自分に厳しいだけに周囲への要求も高い。選手には体脂肪率12%以下を厳命し、スタッフが作成した分析映像にやり直しを命じることも多い。

不満や批判は覚悟の上。協調や一体感を重視したザッケローニ元監督(10年8月~14年6月まで指揮)とは

対照的だが、密着取材を続けていると意外な一面も見せてくれる。

プライベートで移動する際の空港など、JFAから「対応はない」と通達されている現場でも、ハリルホジッチ監督はJFAハウスに常駐の番記者を見つけると、向こうから歩み寄り、ぶら下がり取材に応じる。昨年12月の運動記者クラブの合同取材では、報道陣に自腹でシャンパンを振る舞った。ディアナ夫人と一緒に相撲観戦した後に女性ファンに囲まれた際には「私生活は彼女(ディアナ夫人)に完全にコントロールされている」と苦笑いで尻に敷かれていることを示唆。人間味あふれる言動も多く、どこか憎めない。

対戦国を徹底分析して相手の長所を消すのが、ハリルホジッチ監督のスタイル。ボール保持率アップを追求してきた近年の日本サッカーの潮流に逆行する部分もあるが、格上ぞろいのW杯本大会ではリアクションサッカー(堅守速攻)が効力を発揮する可能性は高い。日本がW杯で上位進出を果たし、堅物の指揮官と再び一緒に、シャンパンを飲めることを期待している。

きもと・しんや▼2001年入社 静岡支局を経て、05年からスポーツ部サッカー担当 北京五輪・W杯南アフリカ大会・W杯ブラジル大会などを現地取材

新・列島報告⑭ 神戸市

「不倫市議」から「不正市議」へ 異様に高まった報道価値

森本 尚樹
(神戸新聞社)



日に今井氏との対談を掲載した市政報告を政務活動費で作成、配布していたという記事を掲載した。不倫と政活費流用という2つの疑惑を持たれた橋本氏は同日夜、緊急会見を行い、今井氏との男女関係は「一線は越えていない」と否定。政活費は「誤解を招いた」として約30万円を返金した。

問題は収束したように思われたが、橋本氏はすでに時の人となっていた。8月23日付「新潮」は橋本氏が知人の自動車販売業者に市政報告の印刷を架空発注し、政活費を詐取していた疑いがあると報道した。疑惑段階だったが、神戸新聞も世間の橋本氏への関心の高さを考慮し、記事掲載した。



今井絵理子参院議員との不倫疑惑が報じられ、会見する橋本健氏(7月27日/神戸市役所/神戸新聞社提供)

同日、会見に応じた橋本氏を囲んだ報道陣は約50人。カメラも10台は並んでいた。会見は神戸市政記者クラブの仕切りで行われたものの、主導権は早々に情報番組に奪われた。お約束の「政活費の使用で一線は越えていませんでしたか？」との質問に、一般紙記者は眉をひそめた。

翌日、事態は急転する。疑惑の自動車業者が「橋本氏の求めて架空の領収書を作っていた」と暴露したのだ。橋本氏の「報道価値」は芸能人並みに高まっており、在阪の全国紙も一地方議員の不正としては異例の社会面カタ位置での掲載に踏み切った。

橋本氏の自宅マンションや経営する歯科診療所の前には数日間、報道陣が張り込み、28日、橋本氏の議員辞職を発表する市議会の会見には70人近い報道陣が詰めかけた。9月5日、橋本氏は市議会の調査に不正を全面的に認め、その速報記事はYahoo!ニュースのトップを飾った。

取材フィーバーで不正が次々と 「号泣県議」と共通する展開

ちなみに、神戸市議会では2015年に自民党派による組織的な政活費不正流用が発覚している。神戸新聞の調査報道が端緒で、計3754万円が返還される結果となった

が、全国的な関心事にまでは発展しなかった。

橋本氏の事例に近いのは、14年に政活費の不正が発覚した野々村竜太郎・元兵庫県議だ。全国各紙は当初、195回のカラ出張による300万円の架空請求疑惑を静観していたが、あの「号泣会見」後は大々的に報じ始め、取材競争の成果として、他の複数県議の不正を暴くことができた。

もし、橋本氏に今井氏との不倫疑惑がなければ、一連の不正を表に出せなかったかもしれない。スクandalによって高まった橋本氏の報道価値に各メディアの取材エネルギーが集中し、それがさらに報道価値を高める中で、橋本氏は「不倫市議」から「不正市議」に堕ちていった。

橋本氏の政活費不正疑惑を報じた「新潮」が発売された8月23日、私は神戸市政記者クラブ幹事社として、橋本氏に差し向かいで会見を要請した。橋本氏は「政活費以外(不倫問題)を聞かれるのが嫌だ」と渋ったが、結局応じた。その会見で、彼は毅然としていたが、話した内容は結果的に、ほほうそだった。

もりもと・なおき▼1997年入社 社会部 明石総局を経て 2013年から社会部(14年に報道部に改組)

被災地通信⑤ 岩手県岩泉町

台風10号豪雨から1年 教訓つなぐ報道を模索

川端 章子(岩手日報社)

岩手県岩泉町で8月30日に行われた台風10号豪雨の犠牲者追悼慰霊式。「泣くつもりはなかったんだけどね。涙がどんどんあふれて」。かけがえのない家族を失った女性が漏らした言葉。遺族、行方不明者家族の思いは時間で区切ることができないものではない。あの日から1年がたち、改めて胸に刻む。

2016年8月30日の台風10号豪雨は岩泉、久慈、宮古の3市町を中心に甚大な被害をもたらした。本県では21人が亡くなり、2人が行方不明のまま。県のまとめでは土木施設



被災地支援として岩泉町で行われた熱気球体験搭乗会（9月16日／本社小型無人機で撮影／岩手日報社提供）

や農業、水産関係などの被害総額は1400億円を超え、東日本大震災を除く自然災害では最大となった。

道路復旧工事発注率は3割

この台風被害の報道で大きく取り上げられた1つが、入所者9人全員が犠牲となった岩泉町の介護老人保健施設だ。「避難準備情報」の意味が十分に理解されず人的被害が拡大したとされ、国は名称を「避難準備・高齢者等避難開始」に変更。県内の福祉現場では「悲劇を繰り返すまい」と防災意識を高め、実効性ある情報共有の在り方や計画づくりが進む。

一方で、地域再生には課題も少ない。3市町では発注側のマンパ

ワー不足などが影響し、道路など復旧工事の発注率が30%（7月末）にとどまる。被災者の住宅再建においては資金面での支援に東日本大震災と開きがあり、将来に不安を募らせる住民がいるのが現状だ。過去の災害では一度は助かった命が復興への道のりの途上で失われている。中長期的な支援が欠かせない。

全国の災害現場へ記者を派遣

岩手日報は東日本大震災以降、全国の災害現場への記者派遣を続けている。14年の広島土砂災害に始まり、御嶽山噴火や関東・東北豪雨、熊本地震など災害の種類もさまざま。現場に立ち、▽震災の教訓はどう生かされているのか▽必要な備えと新たな教訓は何か▽本県においてはどのような課題があるのか―を取材し、紙面を通じて伝える狙いがある。

豪雨が引き金となり、77人が犠牲になった広島市の土砂災害。避難所取材で被災者に声を掛けた時、真っ先に出てきた言葉は「あの震災があった岩手から来たの？ 大変だったでしょう」だった。自分が被災しながらも、東日本大震災の被災地に思いを寄せる姿が心に残っている。

だが、その後に続いた言葉も強く印象に残った。「まさか自分が被災

するなんて」「こんな災害が発生するとは思ってもみなかった」。今年7月に訪れた九州北部豪雨の被災地では「一歩間違えば、利用者が犠牲になっていたかもしれない」と特別養護老人ホームの施設長が打ち明けた。裏山が崩れて敷地内に土砂が流れ込んだが発生は想定外。震災や台風10号豪雨で教訓を残した高齢者ら「災害弱者」の避難対策の課題が、改めて浮き彫りになった。

取材を重ねて強く実感したのは、災害を「我が事」として考え、備える重要性だ。だからこそ災害取材では被災地の現状を伝えるだけでなく、現場で得た課題を本県に当てはめ、今後の防災対策につなげるための企画なども展開してきた。

自然と向き合い、災害と隣り合わせだという意識を一人一人が持たなければ、自らの命を守ることはできないと強く思う。同時に、その意識を共有することが備えの第一歩であると感じる。国内外で自然災害が頻発する今、死者・行方不明者を出さないためにどうしたらいいのか。記憶の風化を防ぎ、犠牲者の遺訓、災害の重い教訓を広く伝えていく報道の形を模索し続けていきたい。

かわばた・あきこ▼2004年入社 総務部 釜石支局などを経て 17年4月から報道部長

悼 追
クラブ賞受賞

人間万歳 社会部一筋
山本祐司さん

話は60年安保闘争報道にさかのぼる。

81歳で7月22日に亡くなった元毎日新聞東京本社社会部長、山本祐司さんを送る会が9月15日に開かれ、やはり元社会部長で91歳の牧内節男・元スポニチ社長が半世紀以上前の報道に触れた。

東大生、樺美智子さんが国会南通用門付近で亡くなった事件を伝えた1960年6月16

日付毎日新聞社会面に共感し、毎日新聞を志望した学生がいた、と。山本さんは翌61年入社で、この報道を機に「毎日」を選択した世代だ。



夫人久子と1枚飾られた会入りのお気

社会部長在任中の50歳の時、脳出血で倒れ右半身の自由を奪われたが、久子夫人に支えられ、左手で『毎日新聞社会部』を執筆。『最高裁物語』で95年に日本記者クラブ賞を受けた。社会部を愛し続け、社会部一筋の記者人生だった。

1976年のロッキード事件当時、山本さんは司法キャップ。田中

元首相逮捕当日の毎日新聞朝刊は一面トップで「検察重大決意へ」と的確に予告したが、この原稿は山本さんの指示で書いた。戦後最大の疑獄報道は、司法記者としての集大成だった。

送る会に後輩記者は「ロッキード報道に憧れて入社した」とコメントを寄せた。私は東大闘争当時の紙面に共感して入社した世代で、因縁を感じつつ遺影に黙禱した。

早稲田大学進学以前から童話作家を夢見た山本さん。権力に対して厳しい姿勢を持ち続け、しかも人間に

優しいまなざしは、終生、変わらなかった。自宅がある浦安市で障害のある人とともに立ち上げた雑誌『ルパン文芸』。

「人間万歳」の絶筆が掲載された20周年記念誌を、120人を超える参加者が手に取った。山本さんは『毎日新聞社会部』執筆後、続編に意欲を燃やしていた。女性初の社会部長、磯崎由美さんは「こんなに愛された新聞記者には会ったことがない」と会を締めくくった。一人一人の心に、大きな存在が生き続けてほしい。

元毎日新聞社会部 高尾 義彦

葛根廟事件の証言



ソ連軍攻撃で
日本人多数が死亡

果たしてどれだけの人が、終戦の直前に起きた、この悲惨な事件のことを知っているだろうか。

1945年8月14日、満州（現中国東北部）のチベット仏教寺院、葛根廟の近くで、日本人避難民がソ連軍の攻撃を受け、1000人以上が死亡した。これが葛根廟事件だ。

映画は、当時の状況を知る生存者や遺族ら12人のインタビューで構成、事件を時系列で追っていく。

満州国興安省の省都、興安には3000人の日本人が居住していた。8月9日未明、ソ連参戦の報が入る。この後、素早く逃れた人々と、列車には乗れず、南東に35キロ離れた葛根廟を目指した人々の間で明暗が分かれた。約1300人の集団にソ連軍の戦車部隊が砲撃を行い、最終的

な生存者は約130人だった。

自決によって亡くなった人も多かったという。母親たちは、幼い子どもたちの首にナイフを当て、あるいは毒薬を飲ませた後、自らの命を絶っていた。母や妹の最期を語る証言者の表情が痛々しい。

この作品を製作した映像ディレクターの田上龍一さん（43歳）は、3年前に事件を知ったという。生存者らが編纂した『葛根廟事件の証言―草原の惨劇・平和への祈り』（新風書房）の刊行を伝える新聞記事を読んだのがきっかけだった。

この時、日本記者クラブで行われた関係者の会見の様様をネットで見て大いに触発されたという。現地への慰霊の旅にも同行した。

ロシア側に事件の記録はないという。一方で、ソ連の攻撃は、組織的、計画的で過激だったという日本兵の目撃談がある。なぜ民間人に向かったそのような攻撃が行われたのか。事件の分析は、残された課題だ。

ともあれ、歴史の記憶を刻む貴重な映像記録である。

読売新聞社論説委員 天日 隆彦

同作品60分版が（公社）映像文化製作者連盟主催の「映文連アワード・企画特別賞」を受賞した。11月末に受賞作上映会がユーロライブ（渋谷ユーロスペース内）で開催される予定。

モンテ・クリスト伯の影 イタリア自然保護区の孤島へ

後藤 文生



ごとう・ふみお
1935年生まれ 57年読売新聞社入社 社会部長 編集局次長兼文化部長 常務取締役事業局長などを務め 98年広島テレビ放送へ 同社取締役副社長 代表取締役社長 同会長を歴任 現在 顧問

イタリア・エルバ島南部の小さな漁港で、漁船に乗せてもらう約束だった。古ぼけた街灯がまばらに光っていたが、ほとんど暗闇に近い。深夜の岸壁で10分ほどたったところ、サンダル履きの足音が近づき、私の前で止まった。色黒の、ひげの濃い男だ。

「話は聞いている。はやく乗れ」男がアゴで指した汚れた小船には「Flora」という字が船首に読めた。（これが花か）とつぶやきながら甲板に移ると、船はエンジンの音を響かせて岸を離れた。

やがて岸壁の灯りも遠ざかり、船は漆黒の闇に突き進んだ。「モンテ・クリスト島」。トスカナ群島の1つ、エルバ島の南40キロにある小島に向かった。

◆天皇皇后両陛下 欧州訪問に同行
ここに至るいきさつを述べよう。

1971年9月、天皇、皇后両陛下はヨーロッパ諸国の旅に出られた。デンマーク、ベルギー、フランス、イギリス、オランダ、スイス、西ドイツ（当時）の7カ国。同行取材を命ぜられて9月27日から10月14日まで7カ国を走り回り、最後の西ドイツに着いた頃は疲労困憊、両陛下が帰国された後は、1日中ホテルで眠っていた。

忙しさに疲れただけではない。さきの大戦でこの7カ国と日本がどう向き合っていたかによって、行く先々での対日感情はさまざまだった。オランダ、イギリスでは特に訪問反発の行動が随所で見られ、車列に瓶や卵などが飛んできた。10月6日、イギリス王立植物園で植樹された杉の木は翌日には切り倒されていた。そんな取材がやつと終わってほつとしたところに、デスクから新たな指

令が飛び込んできた。

「ご苦労さん。ところで、もう1つ取材を頼む。正月の別刷りに世界の自然保護地域を特集する。今年国連が募集して、日本も出している。君はイタリアが出したモンテ・クリスト島を頼む」

◆エルバ島からの漁船がエンスト

（どこにあるんだ）と思いつつボンからローマへ。とりあえず自然保護を所管する役所を訪ねた。

「モンテ・クリストに行く航路はない」というのが最初の答えだった。しかし、自然保護というのは当時、世界的にホットなテーマだったから実によく面倒をみてくれた。

「まず、エルバ島に渡りなさい。漁に出る船がモンテ・クリスト島の脇を通るから、便乗させてもらいなさい」

役所のボスはいこう言つて、漁船の手配までしてくれた。こうしてわれわれは深夜に漁船を待つことになった。

船は、次第に波が立ち始めた沖合を進んでいたが、突然ボンと音がして動かなくなった。同時に激しく左右に揺れ、海に投げ出されないうようにロープにしがみつくのが精いっぱい。すると、船倉から一人の少年が飛び出してきた。船長を手伝い始めた。それまで暗い船底で寝ていたらしい。

やがて船は立ち直り、レーダーに小さな島影が映った。

夜が明けるにつれて島は肉眼でもはっきり見えるようになり、海底火山が海面に突き出したような鋭い小山を形作っていた。

だが、島に上陸してからも、なぜこのみずばらしい小島が自然保護の候補地なのか不思議だった。



1972年1月1日付別刷り特集(読売新聞社提供)

何かの手掛かり、この島を意味付けるものとしては、アレクサンドル・デュマの小説『モンテ・クリスト伯』の中で、重要な役を持っているというところぐらいだった。

しかし、それはフィクションの世界の話である。小説の筋は多くの方がよく知っていると思うが、エドモン・ダンテスという船乗りが無実の罪で投獄され、長い獄中生活を送る。その中で高齢の司祭に出会い、いろいろな教えを受ける。司祭は死の間際にダンテスに財宝を譲り、その在りかがモンテ・クリスト島であると告げる。彼は司祭と入れ替わって脱獄し、財宝を手にしてモンテ・クリスト伯を名乗り、自分を罪に陥れた者たちに復讐する。

島のたたずまいは、実物と小説は

異なるといわれているが、いずれにしろ小説は小説、現代社会に直接関わりはないだろう。

「こうした黄金や宝石に手を触れ、ふるえる手をその中に突っ込んだ後で、ダンテスは立ち上がったかと思うと、狂人のように体を興奮に震わせながら、洞穴の中から走り出た。彼は、海を見渡す岩の上に躍り上がった。」(『モンテ・クリスト伯』山内義雄訳・岩波文庫)

彼が島で洞窟を発見し、財宝を手にした瞬間である。

だが、島のどこを探しても、洞窟などはなかった。案内してくれたレインジャーについて山道を歩き始めると、足元の茂った草が爽やかな芳香を放った。

「ローズマリーノ」。彼が草を指してこう言った。



しばらく斜面を登ると、水をいっぱいいたたえた穴があった。表面は枯れ葉で覆われていたが、その下は透명한真水だった。穴の入り口から大きくえぐれた足跡が、さらに上った廃虚にまで続いていた。

◆水場と僧院を結ぶ足跡が：

廃虚というのは、中世に島に建てられた僧院の跡である。信仰の対象となり、いろいろな貢ぎ物があったらしい。それを狙った海賊も頻繁に現れる。19世紀初めには僧院もなくなり、僧たちが財宝を埋めたという伝説だけが残った。僧たちはこの水場から斜面にえぐられた足跡をたどって、僧院まで水を運んでいたのだろうか。

自然といえば、山頂付近に野生のヤギが生息していて、19世紀半ばにはこれを狙った狩猟クラブができた。金持ちが建てた山荘がクラブハウスとなつて、一家4人の管理人と例のレインジャーが寄宿人として住んでいた。つまりこの5人を除いて島本来の住人というのはゼロだった。

翌朝、山荘の裏庭にある小屋に案内されて、そのあたりに一家の小さな生活の痕跡を見ることができた。小さなツボには小さなイワシが塩漬けになっていた。天井にはカラスウリのようなトマトがぶら下がり、半分紫色に染まったホーロー浴槽が転がっていた。

「これでブドウをつぶしてワインを作っていたんだ」
外にはオリブの木が茂り、島の周りで一家が釣りに使うボートがあった。そのボートで島の周りを一周

してみた。切り立った海岸線はすぐ濃いエメラルド色の海に沈み、めばしいものは何もなかった。

東京に戻って原稿を書いて、それでもなお釈然としない気持ちが残った。もう一度、私は『モンテ・クリスト伯』を読んでみようと思いついたが、それを果たしたのは、それから随分たつてからだった。

小説は岩波文庫で全7巻。そこで気付いたのは、2巻目ですでにエドモン・ダンテスは財宝を掘り出しているのだ。彼は、そこからモンテ・クリスト伯に変身する。物語の大半はそこから始まる。モンテ・クリスト島は、ただ宝を見つけるだけの島ではなく、モンテ・クリスト伯を生み出す島であり、後の5巻の土台である。

自然環境と架空の物語は混然一体となつていて、切り離せないものだということを知らされたのだ。島が自然保護区になる意味を、モンテ・クリスト伯の影に見いだすべきであった。今頃になって、そういう視点を持たなかったことが残念でならない。

蛇足だが、翻訳者の山内義雄教授(早稲田大学)に、学生時代フランス語を教わった。先生はすごいヘビースモーカーで、授業中も唇の端から煙草を離さなかった。鼻が煙でいぶされて茶色に染まっていた。

私が会った
あの人の

「日中国交回復は裏安保」

角栄さんの肉声の意味と真意

小田 敏三（新潟日報社）

「印象に残る世界の指導者は？」

私の質問に田中角栄元首相、角さんは間髪入れず答えた。「周恩来だ」「どんな点にですか？」とたたみかけると「官僚を束ねられる政治家だ」。

1983（昭和58）年9月。東京・目白の田中角栄邸応接間。いつものように午前11時45分、早朝からの陳情時間が終わった。私も帰り支度をしていたとき、偶然に最後の客を玄関先に送りに出てきた角さんから声が掛かった。「飯食っていけ。店屋物（出前）でいいか。チャーハンがいいな」。思いもよらぬ誘い。それから1時間、幸運な2人きりの昼食となった。だが角さんにとっては、1カ月後に5億円受託取賄罪に問われたロッキード事件の一審判決が迫る、緊迫した時だった。

食事を取りながら、問わず語り

に角さんが口を開いた。

「日中の国交回復は裏安保なんだ。新聞記者はそんなことも勉強していない」

34歳の私は9年目の駆け出し記者。角さんは65歳で政界の閣将軍。勉強不足の駆け出し記者相手に怒るでもない、むしろ金権批判ばかりの日々にやりきれない思いがにじんでいるようだった。

「日米安保によって日本は、国防を米国に任せ、自分たちは経済繁栄を享受できた。これからは分かん。米ソ関係が悪いと日本に軍備の強化を要求してくる。米国とソ連（ソビエト）社会主義共和国連邦。1991年12月崩壊）、日本とソ連の間にいる中国の数億の民が壁となれば、日本は経済繁栄を続けられる」

「日中は裏安保」。角さんの肉声の意味と真意を確かめるべく私は、池田勇元首相（故人）の秘書官だった

た伊藤昌哉（故人）さんの元に走った。日中国交回復交渉の際、田中首相に同行した外相が大平正芳（元首相・故人）さんであり、大平さんの師は池田元首相である。

伊藤さんは聞くなり「本当に角さんがそう言ったのか」。信じられないうとばかりに何度も念を押された。「二字一句本当です」と言うと、感慨深そうに語り始めた。

「池田が大平にずっと言い続けていた話だよ。日本が敗戦から立ち直り、経済繁栄を成し遂げたら、いずれ米国から軍備の増強を迫られる。その前に中国との国交正常化が大事だ、とな」

何度も何度もうなずきながら伊藤



周恩来中国首相に迎えられ、握手を交す田中角栄首相（1972年9月25日／北京・人民大会堂／新潟日報社提供）

さん。「そうか。大平の知恵と田中の決断があつてこそ、日中国交回復は成し遂げられたんだな」角さんの「功」と「罪」が語られるとき、いつも思い出すエピソードのひとつだ。

「日中裏安保論」から1カ月後の10月12日、「懲役4年、追徴金5億円」の実刑判決が出された。私は言い渡しの瞬間を間近で見た。こめかみがピクリと動き、ギョツと握りしめた拳がみるみる赤みを増す。被告席に戻る際、記者席に向けた鋭い眼光は怒気を含んでいた。

1984（昭和59）年6月、角さんは新潟日報の6時間インタビューに応じた。雑談になったときだ。「いいか！ 将来、事を成すには広大な中間地帯をつくれ。本当の味方はせいぜい2人。地獄の釜は狭いんだ。敵は1人でも少なくしろ」

自らに言い聞かせるように、まぐし立てていたのが印象的だった。

（おだ・としぞう 代表取締役社長）
次号は富田詢一さん（琉球新報社）にバトンが渡ります。

マイBOOK
マイPR

■グローバル・ジャーナリズム——
国際スクープの舞台裏

澤 康臣（共同通信社特別報道室次長）

各国記者の挑戦と「日本の壁」 国
も会社も違う記者が手を組み不正を
暴く、国際調査報道。その現場はこ
うなっている。世界の記者やメデ
ィア関係者ら70人が登場し、最新取
材テクとジャーナリズムへの思いを
語る本。パナマ文書報道最大の危
機、アフリカに浸透したマフィアを
追う「イタリア・アフリカ各国記者
連合」の活躍、中国2000年代の
「調査報道の春」の終焉、記者が記
者を教える米国の特ダネ教室……そ
して国内の調査報道記者を阻む「日
本の壁」の正体
も明らかにす
る。



岩波新書
929円

■わけあり記者 過労でウツ、両親
のダブル介護、パーキンソン病に
罹った私

三浦 耕喜（中日新聞社生活部）

「わけあり」を抱えて生きる全ての
人へ 夜討ち朝駆け、事件・政局で
は三カ月は休みなし：メディアにお
いても、そんな働き方はそろそろ限

界です。人もいて経費もハイヤーも
使い放題、携帯もなかった時代の自
慢話では、もはや説得力はありません。
意義ある仕事を苦役にするクラッ
シャー上司がいます。見渡せば、介
護や子育てでできりきり舞いの人ばか
り。病との闘いも深刻です。「わけ
あり人材」をどう活用するか。拙著
が共に考える
きっかけにな
れどと思いま
す。



高文研
1620円

■戦略の地政学 ランドパワーVSシ
ーパワー

秋元 千明

（RUSI Japan所長・NHK出身）

地政学で読み解く世界 集団的自衛
権、北朝鮮核問題、日本の安全保障
論議は意見の幅が非常に広い。武力
を行使しても世界に貢献せよとの
意見もある、非武装こそ真の平和
主義という意見もある。大戦後、日
本の針路について明確なビジョンが
ないまま大國
に成長してし
まったから
だ。いくら欧



ウェッジ
1728円

州の小国に憧れても、1億人の人口
と経済力を抱える日本には、はじめ
から大國としての生き方しかない。
日本の未来を考えると、地政学が
役に立つ。

■香害 そのニオイから身を守るには

岡田 幹治（朝日新聞出身）

「香害」の実態・原因・対策を網羅
身の回りに香りつき商品があふれ
るようになり、そこから放散される
微量の化学物質によって深刻な健康
被害を受ける人が急増している。こ
れが「公害」ならぬ「香害」だ。



金曜日
1512円

■白兔で知るロシア ゴルバチョフ
からプーチンまで（増補版）

小林 和男（NHK出身）

ロシアを教えてくれる白兔 日口首
脳会談の共同会見を聞いても成果の
ほどはさっぱり分からない。大統領
の行動も日本的な常識を越えるか

ら、ロシアはますます嫌われる。長
年ロシアに暮らして、ロシア理解に
役立つ法則があることを知った。そ
れを知っているだけで首脳会談の中
身でも正しく推測できる。ロシア人
と表も裏もある付き合いの具体的な
エピソードで、その法則を紹介した
のが本書。白兔とは何だ？ ロシア
のしぶとさ、嫌らしさ、そして面白
さを教えてく
れる動物で
す。



かまくら春秋社
1620円

■美智子さまに学ぶエレガンス

渡邊 みどり（日本テレビ出身）

日本で最も「エレガンス」を身に付
けた女性 気品、人間の品格こそが
「エレガンス」だ。皇后美智子さま
の装いや立ち居振る舞い、笑顔、お
言葉から感じる「エレガンス」の源
には、「お相手を思いやる心」があ
る。だからこそ国民からの尊敬を集
め、愛される存在なのだろう。美智
子さまは、日本人が、今だからこそ、
お手本にしたい「エレガンス」を多
く持っていていられる。その「エレガ
ンス」の秘密を、お写真ととっておき
のエピソード
と共に伝え
する1冊。



学研プラス
1512円

情報発信

クラブ施設では会員による各種の会合が行われています。企業や大使館などの賛助会員も記者発表の場としてクラブを利用しています。

■セミナー「ジェンダーとメディア」

主催：朝日新聞ジャーナリスト学校

「メディアスポーツとジェンダー」「ジェンダーガイドブック～新聞社の取り組み」などの講演後、「ステレオタイプを超えて」と題したパネル討論が開かれ、宮崎真佐子TBSプロデューサー、大門小百合ジャパントイムズ執行役員編集・デジタル事業担当ら4人が意見を交わした。約100人が出席。(9.9 10階ホール)

■第29回高松宮殿下記念世界文化賞 受賞者発表会見

日本美術協会が1988年に創設。絵画、彫刻、建築、音楽、演劇・映像の各分野で世界的に顕著な業績をあげた芸術家に毎年授与されている。9月12日の世界同時発表に先駆けて、同賞の国際顧問を務める中曽根康弘元首相、清原武彦元産経新聞会長らが出席し会見した。受賞者は同賞公式サイト(<http://www.praemiumimperiale.org/ja/>)に。(9.11 会見場)

■農政ジャーナリストの会 月例勉強会

9月例会は「社会のために獣医師にできること～小動物医療の現状と課題から～」と題して太田恵慈犬山動物総合医療センター代表が講演した。(9.12 大会議室)

■デジタルメディアセミナー・パネル討論

主催：日本新聞協会

デジタルメディアの技術革新が進む中で、新聞・通信社の情報発信やビジネスがどうあるべきか。藤代裕之法政大准教授、藤村厚夫スマートニュース執行役員、荻田伸宏ヤフーニュース編集部長、平栗大地朝日新聞デジタル編集長が登壇し、ネットニュースの質向上と信頼回復について議論した。(9.14 10階ホール)

■新聞通信調査会月例講演会

山田恵資時事通信社解説委員長が「政治の現状と展望」をテーマに講演した。(9.15 会見場)

■読売テクノ・フォーラム研究交流会

読売テクノ・フォーラムが会員を対象にした講演会。東京医科歯科大学の川島健嗣教授が、手術支援ロボットの研究開発について話した。約50人が出席。(9.25 会見場)

■第46回「都市問題」公開講座

主催：後藤・安田記念東京都市研究所

「自治体の『人手不足』をどう乗り越えるか」をテーマに上林陽治地方自治総合研究所研究員、平野公三岩手県大槌町長らが議論した。

自治体の総職員数は経済・財政の停滞を受けた定員抑制が続いている。特に一般行政部門では対94年比で22%と大幅に減少している。(9.30 10階ホール)

新しいOB会員

■ ■ 浅井 賢二 1977年名古屋テレビ放送入社。ANNワシントン特派員、報道局長、代表取締役専務など。現在、同社顧問。



テレビもメディアも、そして世界も激変の時代です。取材・制作現場で心ときめいた感動を忘れず、内外の動きについていきたいと願います。

■ ■ 佐藤 章 1981年朝日新聞入社。東京・大阪両本社経済部、アエラ、週刊朝日各編集部、ジャーナリスト学校主任研究員などを務め7月退社。現在、五月書房新社取締役・編集委員会委員長。



新しい時代に出版社の新しいビジネスモデル構築を目指す。同時に、「志」のあるジャーナリスト活動を続けたいと考えています。

■ ■ 廣瀬 千秋 1992年産経新聞入社。大阪本社編集局編集長、九州総局長、東京本社営業局長、日本工業新聞専務取締役などを務め2016年退社。現在、国際医療福祉大学理事。



広報担当としてメディアと接するようになり、むしろ報道の在り方に関心を持つようになった。逆サイドからの視点で報道を考える場にしたい。

■放送人政治懇話会

テレビ・ラジオ局の現役・OBによる定例の勉強会。齋藤健農水相(9.6)、若狹勝衆院議員(9.13)、小野寺五典防衛相(9.21)、大島敦民進党幹事長(9.27)を招いた。

■会議報告

●第386回会報委員会(9.7 大会議室)

8、9月号について意見交換した後、10月号の編集について協議した。

出席 小林委員長、梅原、高橋、草間、仙石、大寺、長友の各委員。

●第477回企画委員会(9.12 会見場)

新委員の出川展恒NHK解説委員(旧・山崎登氏)と、9月末で退任する山本勇二委員がいさつした後、記者研修会(8.7、8)、新潟取材団(8.9)、民進党代表候補討論会(8.22)、中国取材団(7/24～31)について、それぞれ担当委員が報告した。今後のゲスト選考を行ったほか、「2018年経済見通し」研究会担当委員を委嘱した。

出席 西村委員長、坪井、上田、橋本、鶴原、実、山崎(浩)、今井、別府、小川、榊原、川上、山田、木村、友安、山本、宮内、島田、竹田、出川、川戸、播摩、小栗、川村、福田の各委員。

●第481回会員資格委員会(書面)

10月1日付の入会を審議し理事会に答申した。

レストラン*価格は全て税込みです

予約電話 和食 3503-2723 洋食 3503-2766・2731

和食 長月懷石(11/2まで)

先付：秋刀魚寿司、衣かつぎ お椀：土瓶蒸し
造り：三点盛り 焼物：鰯雲丹焼き 煮物：山菜
豆腐 揚げ物：きのこ天ぷら 食事：松茸ご飯 水
菓子：季節の果物 グラス冷酒付き(5,400円)
(板長：大井由光)

洋食 季節のコース(11/4まで)

ノルウェーサーモンのサラダ仕立て、いろいろ
きのこ入りコンソメスープ、シェフ特製タンシチ
ュー・秋の温野菜添え、クープドマロン、パン、
コーヒー付き(3,564円)。ランチ、ディナー(土曜
日はランチのみ9階レストラン)ともにご利用いた
だけます。(シェフ：黒須修一)

特製きりたんぽ鍋がおすすめです

11月13日(月)～24日(金)

毎年好評いただいている「きりたんぽ鍋」を、
10日間限定(土曜日は除く)で今年も提供しま
す。産地直送で比内地鶏を仕入れ、アラスカ特
製のだし汁で調えます。お一人2,500円で、お二
人からお受けします。必ずご予約(03-3503-
2723)をお願いします。

忘年会、新年会は個室でお楽しみください

12月1日(金)～1月31日(水)

社内の忘年会や新年会に、お手ごろなプラン
をご利用ください。お一人3,240円(洋食8品と
すし、そば)で、1,404円をプラスして2時間の飲
み放題にすることもできます(別途、部屋代が加
かります)。ご予約は03-3503-2724へ。

お集まりには貸室を 空き状況はウェブサイトで

ラウンジは少人数でのご利用をお願いしてい
ます。大勢の場合はお部屋をご利用ください。
空き状況は日本記者クラブのウェブサイトで確
認することができます。

「施設利用案内」から「空室確認」を選ぶと貸室
(9階小・大会議室、会見場、10階ホール)の空
き状況が表示され、1年先まで参照できます。

クラブ貸室には「直前割引」もあります。利用
日から1週間以内の予約は室料が半額になるサ
ービスですので、急な会場探しにご活用くださ
い。ご利用の当日でも空きがあれば同様にお使
いいただけます。

詳しくはラウンジ受付のフロアマネジャー
(03-3503-2724)にお問い合わせください。

会員の新刊書を紹介します

原稿をお寄せください

会員の皆さまが出版された本を「マイBOOK
マイPR」で紹介しています(17頁参照)。200字
程度で内容や狙いをおまとめください。お問い
合わせは下記までお願いします。

担当：青山幹史 電話：03-3503-2729

メール：aoyama@jnpc.or.jp

会見参加は事前にお申し込みください

会見場の設営や資料の準備は申し込み人数を
参考にしていますが、最近、用意した席や資料
が足りなくなることが増えています。前日まで
にお申し込みいただくようご協力ください。下
記のほかホームページからも登録できます。

メール：kaiken@jnpc.or.jp

FAX：03-3503-7271 TEL：03-3503-2722

メールアドレスの登録をお願いします

会合のご案内はメールで受信されるのが便利
です。急な日時の変更・中止など、はがきで間
に合わないお知らせも、メールではすぐにお届
けできます。お名前を明記したメールを下記の
アドレスにお送りください。OB会員の皆さまに
もご協力をお願いします。

メール：kaiken@jnpc.or.jp

コピー機精算 プリペイドカードが便利です

ラウンジのコピーはプリペイドカードで精算
できます。カードは110枚が1000円、220枚分が
2000円の2種類で、どちらも現金精算よりも1
割お得です。このカードは受付で販売しています。

<訃報>

近藤健会員(毎日新聞出身、84歳)が8月31日
に死去されました。謹んでお悔やみ申しあげます。

今後の行事予定(10/2現在)

19㊦	14:45～16:00 9階会見場 研究会「トランプ政権と米国の行方」①① ブルース・ストークス・米ビュー・リサーチセンター 国際経済世論調査部ディレクター
23㊦	15:00～16:00 10階ホール 「チェンジ・メーカーズに聞く」②③ 高島宏平・オイシックスドット大地社長

クラブの電話 ダイヤルイン

- 和食レストラン(9階) …… ☎3503-2723 ●会員事務 …… ☎3503-2727
- 洋食レストラン(10階) …… ☎3503-2766 ●経 理 …… ☎3503-2728
- 貸室予約、宴会打ち合わせ …… ☎3503-2724 ●クラブ行事への申し込み …… ☎3503-2722
- 受 付 …… ☎3503-2721 ●会見申し込みアドレス …… kaiken@jnpc.or.jp

会員現況

- 法人会員：133社 ●基本会員：744人 ●個人会員：1,260人
- 法人・個人賛助会員：62社・137人 ●特別賛助会員：104人
- 名誉・功労会員：11人 ●学生会員：124人 計：195社・2,380人

会報委員会

- 委員長＝小林 毅
- 委 員＝梅原 季哉 大寺 廣幸 勝沼 直子
- 草間 嘉幸 小池 敏夫 河野 博子
- 仙石 伸也 高橋 雅哉 長友佐波子
- 吉岡 政道

(事務局：本庄五月 青山幹史)

☎03-3503-2754 FAX 03-3503-7271

撮影：今泉^{いまいずみ} 慶太^{けいた} (中日新聞社写真部)



愛知県西部ではこの日、大気が不安定な状態になり各地で雷が発生。夜空に稲妻が光りごう音が響いた
= 8月22日、愛知県豊山町の県営名古屋空港

報道写真 今と昔

シャッターチャンスはどこに転がっているかわからない。掲載写真を撮った今泉記者の場合、別件の空撮で社機の格納庫に行ったが雷雨に見舞われ、フライトできなくなった。そこで格納庫の扉を少し開けてみるとすさまじい稲光。迷わず三脚を立てた。

異常気象が常態化しているが、日常生活で恐怖を感じるのは雷だ。稲妻が光るだけで身がすくむ。しかし、落雷による死者は年間総計20人程度と少ない。

空前の落雷死亡事故といえ、ちょうど50年前の1967年8月1日に起きた、長野県松本深志高校の生徒が北アルプス西穂高岳の独標を集団登山中に落雷に遭い11人が死亡、13人が負傷した事件である。

当時、各社は夏と冬に上高地に記者を駐在させており、一報を受けると西穂に直行した。入社2年目の筆者も上高地駐在だったが、当日は単独で奥穂高岳に登山中。頂上直下で雷雨に見舞われ、下山しかけると西穂方面が騒々しい。あわてて西穂高岳に登り直したが、他社のように現場に行きつけない。シャッターチャンスどころではなく、下山者から写真をもろうことにした。

ところがその中に岩場に生徒と何体もの遺体と一緒に写る1枚があった。特ダネ写真だとして一面7段の破格の扱いとなった。今ならば絶対に紙面化できない類いの生々し過ぎる写真だ。半世紀で写真に対する考え方がずいぶん変わった。

しかし、一番変わったのはスマホの普及で「だれでもカメラマン」時代になったこと。報道写真でスマホカメラマンとの差異化、差別化をどう図るか。実は難問だ。

(長崎 和夫)